

「道を歩いて 見つけたもの」



フリーライター
柴田 依里

避難経路も確認できる散策コース

「異常気象」という言葉も毎年のように耳にする
と、どれが平均的な四季の有り様なのかわからなくな
ってくるが、今年の台風の多さ、すさまじさはや
はり尋常ではなかった。私は生まれ育ちが大阪なの
で瓦や看板が飛ぶ台風も経験しているが、今年9月
の18号のような強風は初めて。北海道のみなさん
にとっては、想像を絶するものだったであろう。お盆
の前に仁木の果樹園の取材をした。その時、「農家
をはじめて何年にもなるが、今年のブドウやリンゴ
は最高の出来」と笑顔で話してくれたおじいちゃん
の顔を思い出すと胸が詰まった。私が胸を痛めて、
何が解決するものでもないのだが。

台風通過の直後、積丹など日本海側の被害が大き
いことをテレビで見て、初夏に泊まった道北の宿の

ことが頭をよぎった。稚内市の抜海という小さな漁
村。宿から漁港までの距離や勾配を思い出すと心配
になり、あわててHPを探すと、BBSにはもっと早
くから心配した客のたくさんの書き込みがあった。
幸い、停電以外は大事なかったようで安心。普段か
ら風の非常に強い土地なので、それに合わせた町づ
くり、建物になっていたためだろうか。

その宿は夕食の前に、見晴らしのよい近所の高台
まで歩いて、夕日を見に行くというミニツアーを行
っている。強制参加ではないのだが、歩くのは好き
なので参加した。15分ほどの腹ごなしになるいい散
歩コース。道端にはなにげなく高山植物が目を喜ば
せ、高台からの利尻富士や夕日は絶景だった。しか
も、そこは高波などの場合に向かう避難場所でもあ
る。このように楽しく、避難経路も周知できるツア
ーは素晴らしいアイデアだと思う。



強風の岬で休憩。しがみついている地標はニシン漁が盛んな頃、網を入れる時に目印と
なる旗を立てる土台（礼文島）

道が教えてくれたもの

数年前、少し心のバランスを崩していた時期がある。心配した友達は、遅い夏休みを取って旅に連れだしてくれた。まだ行ったことのない場所がいいだろうと、礼文島に渡った。9月半ばの礼文は観光客も一段落し、船もさほど混んでいなかった。礼文を訪れる多くの人と同じように、友達はトレッキングのプランを立てていた。島に着くなり、港まで迎えに来てくれた宿の人に荷物を預け、軽装になって島の南側を4時間ほど歩く。花の盛りは終わっていたが、残暑のなか、清々しい汗を流した。

私たちが泊まったのは、家庭的なもてなしと手のこんだ料理が評判でリピーターが多い宿。確かに料理はどれも美味しかったのだが、心身ともに本調子ではない私には多すぎて、ずいぶん食べ残してしまった。

2日目は一転して今にも雨が降りそうな空模様で風も強い。前日に立てた計画では、島の北部を縦断する4時間のトレッキングコースに挑戦するつもりだったが、天気は崩れそう。朝食を食べながら、友達の顔を「やめる？」とのぞき込んでいると、宿のご主人が昼食のおにぎりに、雨具まで持って来た。「食事の片付けが済んだらすぐ送るから」と、躊躇する暇もない。トレッキングコースのスタートまで送ってもらう車中でも、「こういう天気だったら、客が行くと言っても止めるもんじゃないんですか？」とふてくされる私に、宿主は無言の笑顔で答えるばかり。車が去った後は見捨てられたような気分だった。

そこに留まっても、目的地のスコトン岬まで歩い

ても、宿に戻るバスが来るまでは何時間も待たなければならない。仕方なく歩き出すと案の定、目も口も開けられない強風が吹きつけてきた。

手すりやロープがあるところはまだ良いが、なにもないところでは、四つん這いになって地面を手でつかむようにして歩かなくてはならない。尾根道ではリュックごと横風にさらわれそうで、ひたすら身を低くして進んだ。先を歩いていた友達が何度も振り返り、「引き返す？」と聞いてきたが、私はひたすら首を横に振って歩いた。スコトン岬の海をどうしても見たかったのでも、意地になっていたわけでもなかったが、目の前に道が続く限り、前に行くことしかないと考えていた。同じ歩くなら、後ろよりながあるか分からないが、まだ見たことのない先に進みたかった。体も心も前に向かうことしかできない自分と立ち向かえる強さがあつたことを、道と風に教えられた。

頭の中を真っ白にして歩くうちに、無事、しかも予定よりずっと早く終着点に到着。スコトン岬でもまだ強い風が吹き続けていたが、今度は向かい風ではなく、背中を後押しするような心地よいものにさえ感じられた。

その日の夕食をすっかり平らげた後、宿のご主人に「残さず食べさせるために歩かせたんでしょ」と軽口を叩いたら、また無言の笑顔が返ってきた。

後から考えれば、ご主人は地元の気候やコースを熟知し、私たちの体力も見極めた上で行くことを勧めたもので、無事に歩き通せたのは偶然ではない。そして、道を歩くという単純なことで、こんなにも癒され、学べることを教えてくれたご主人には今も感謝している。



なんとか到着したスコトン岬で（礼文島）

柴田依里

Profile

大阪市出身。1995年に札幌に移住、2003年からニセコに拠点を移し、主に旅のコラムなどを執筆する。